

先導的大学改革推進委託事業
「教科専門と教科教育を架橋する教育研究領域の構成案」

「家庭科内容学」構成案

担当者

上越教育大学	光永伸一郎（食物学）（チーフ）
上越教育大学	佐藤ゆかり（家庭科教育学）
鳴門教育大学	前田 英雄（食物学）
鳴門教育大学	黒川 衣代（家庭経営学）
鳴門教育大学	速水多佳子（家庭科教育学）
兵庫教育大学	永田 智子（家庭科教育学）

「家庭科内容学」構成案【要旨】

1 教員養成における家庭科に関する教科の専門性

家庭科における教科の専門性は「衣食住や家族の生活」などの家庭生活に必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得する点に集約できる。

また、実践的・体験的な活動を通して学習するという教科における学習方法の特質があるため、その在り方についても単なる知識の獲得に留まらず、製作や調理などの実習や観察・実験などの実践的・体験的な活動を通して理解する学習形態が求められる。

2 育成すべき家庭科指導ができる小学校教員像

家庭科の重要性を認識し、学習指導要領に示された教科のねらいや特性を十分に理解した上で、教科内容についての正確な知識・技能を習得していることが求められる。さらに、その知識・技能については、他教科領域との連携や、家庭生活をよりよくしようとする実践的態度の育成に資することが望まれる。

具体的には、家庭生活のあり方を考える能力、主体的な生活ができる能力、生活の充実・向上を図るための創意工夫ができる能力、地球的視野で人間の生活をとらえ実践できる能力、社会変化に対応した様々な生活情報を積極的かつ的確に収集し授業に生かす能力、児童・生徒の生活背景を把握し個々を生かす能力等を身につけていることが必要である。

3 小学校教科専門「家庭科」において育成すべき知識・理解等とシラバスの関係

「衣食住や家族の生活」などの家庭生活に関する教科内容は、学習指導要領において4つの領域に分けられており、シラバスもこの枠組みに則った形で構成される。

すなわち、「家庭生活と家族」、「日常の食事と調理の基礎」、「快適な衣服と住まい」、及び「身近な消費生活と環境」の4つの内容について、その背景にある学問の中心的概念、体系的構造、探究の方法を理解した上で、人文・社会・自然科学の観点から的確に説明し得る知識・技能を身に付ける。また、それらの習得過程においては、他教科や領域との連携や、家庭生活を大切にする心情と家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育むことも重要である。

4 期待される成果

教員養成課程において、それぞれの専門領域を担当する教員が、教科内容学の目的と理念を考慮した授業を展開することにより、家庭科の本質を十分に理解した教科指導能力の高い小学校教員を養成できるものと考える。

「家庭科内容学」構成案

I 教科内容学研究の視点と方法

視点1 小学校教員養成における家庭科に関する教科専門授業の実情

家庭科の教科内容学を検討するにあたり、まずは小学校教員養成における教科専門授業の実情について、ウェブ上に公開されているシラバスをもとに情報を収集した。小学校教科専門科目「家庭」に相当する授業に焦点を絞り調査を行った結果、下記の信州大学に準ずる内容構成が複数の大学において見られた。

【信州大学】

授業名：家庭生活基礎A

単位数：2

授業形態：講義

授業のねらい：

家庭生活におけるさまざまな側面について、今日的な課題を学び、家庭生活にかかわる諸課題についての理解を深める。さらに、これらの問題意識に関連して、家庭生活の本質について理解することを目的とする。学生が達成すべき目標：

小学校「家庭科」の内容を構成する家庭生活、家族、食生活、衣生活、住生活および消費者問題、環境問題などの基礎的な事項について習熟する。さらに、生活事象を科学的または社会的な視点から捉え、さらに、児童の学習への関心や意欲を引き出す授業を展開する力を養う。

授業内容とその展開：

第1回 家庭科と家政学

第2回 生活とは何か

第3回 家族とは何か①

第4回 家族とは何か②

第5回 家族とは何か③

第6回 食生活①

第7回 食生活②

第8回 食生活③

第9回 衣生活①

第10回 衣生活②

第11回 住生活

第12回 家庭生活と消費者問題①

第13回 家庭生活と消費者問題②

第14回 家庭生活と環境問題

第15回 試験

教科書：なし（プリントを適宜配布する）

参考文献：小学校教科書「新しい家庭5・6」東京書籍；「小学校学習指導要領」文部科学省（平成20年3月告示）

このシラバスにおける主たる目的は、小学校家庭科を指導する上で必要とされる基礎知識の修得であり、

実際に小学校の家庭科教科書をテキストとして使用している大学も多い。授業内容に関しても、教科書に掲載されている各領域についての解説的な色合いが濃くなっているが、これは学部学生のもつ基礎学力を十分に配慮した結果、提示されたものと考えられる。

すなわち、本来ならば高等学校の卒業時まで定着しているはずの家庭科に関する基礎知識がきわめて曖昧であるため、大学においてはその復習も兼ねた橋渡しの授業が必要なのが現状といえる。これは家庭科が受験科目でないことと関係しているものと思われるが、特に近年、大学新入生の家庭科に対する学術的認識は乏しく、他教科や領域との関連性についての理解も希薄なように感じられる。

ただし、家庭科専攻以外の多くの学生については、ここで修得した知識のみを携えて小学校現場で家庭科の授業を展開することになると思われる。したがって、この授業の意義はきわめて大きく、内容構成についても各大学において十分な検討がなされているものと推察される。

しかし、たとえ小学校教員になる場合においても、小中連携の推進のためには中学校における教科内容についても十分に把握していなければならない¹。また、家庭科の授業に関わる実践的・体験的な活動（実習）についても、大学においてある程度経験しておくことは必須といえる。よって、これらの点は家庭科の教科内容学を検討する際においても、十分考慮する必要があると思われる。

加えて、このような状況から判断しても、「家庭」に関する必要最低限の基礎知識や技能をわずか2単位の授業に収めることについては、時間的にきわめて厳しいのが実情といわざるをえない。すなわち、限られた時間をいかに有効活用するかが、もう1つの大きな検討課題といえる²。

時間的制約については、各大学においてさまざまな検討がなされているものと推察される。たとえば、下記転載した広島大学においては、予習・復習に関する内容が事細かに記載されており、自主学習の内容を充実させることにより授業時間不足を解消できるよう工夫がなされているように見受けられる。

【広島大学】

授業科目名：初等家庭

授業の方法：講義

単位：2

到達度評価の評価項目：

小学校における教科指導および教科横断的な学習指導の理論と方法に関する基本的な知識が身に付いている。

授業の目標・概要等：

小学校における家庭科を指導するために必要な基礎的・基本的な知識を、理解する。

授業計画：

家庭科の5分野について学習する。各分野の授業での順番については、第1回のガイダンスで説明する。

5分野の授業計画は、次のとおりである。

○衣生活分野

第1回 衣服の保健的機能，社会的機能

¹ 小中連携については、小学校学習指導要領（2008）においても特に重視されており、小学校学習指導要領解説家庭編においては、「今回の改訂では、小学校と中学校の内容の体系化を重視して、小学校、中学校ともに同じ枠組みをもつ4つの内容とした。小学校で指導する基礎的・基本的な知識及び技能が中学校の学習に発展していくものとして明確に意識され、着実な定着につながることを目指している。」との記載がある。

² 時間的制約については、2001年「国立の教員養成大学・学部の在り方に関する懇談会」の報告書（「在り方懇」）においても、「特に、小学校教員養成において、わずか数単位である小学校の教科専門科目にどのような内容を盛り込むべきかという教員養成学部独特の課題についても、共通認識が薄かった面がある。」との記載がなされている。

第2回 衣服素材の種類と性質

○食生活分野

- 第1回 食生活の機能。栄養素の働き 炭水化物
第2回 〃 炭水化物・脂質
第3回 〃 脂質・タンパク質
第4回 〃 タンパク質
第5回 〃 無機質
第6回 〃 ビタミン
第7回 食品群，食生活と健康（食生活指針，食事バランスガイド）
第8回 食品表示（期限表示，栄養表示）

○住生活分野

- 第1回 住まいと住環境

○経済生活分野

- 第1回 消費生活と消費者行動
第2回 消費者の権利と責任

○生涯発達・保育分野

- 第1回 家族とは何か・家族構成員の心理的つながり

教科書・参考書等：必要に応じてプリントを配布する。衣生活分野に関しては，さらにウェブページを参照すること。

予習・復習へのアドバイス：

○衣生活分野

- 第1回 （予習）自分の生活の様々な場面を想定し，衣服の役割について考えておく。（復習）授業内容をもとに普段の生活の中で衣服の機能について意識的に考える。
第2回 （予習）自分や家族が使用している衣服素材の種類や性質について調べておく。（復習）授業内容を基に衣服素材の化学構造，原料，性質などをまとめ，自分の生活の中で意識して考えるようにする。

○食生活分野

- 第1回 （予習）栄養素とは何か，を考える。（復習）授業を振り返り，五大栄養素の種類と働きを理解する。
第2回 （予習）脂質の役割について考えておく。（復習）脂質の働きを理解し，食事からの脂質の摂り方について考える。
第3回 （予習）タンパク質の働きについて調べておく。（復習）授業を振り返り，タンパク質の働きについて理解する。
第4回 （予習）タンパク質の栄養価について調べてみる。（復習）食事の中でタンパク質の栄養価を高める，食品の組み合わせを考える。
第5回 （予習）無機質とは何か，またその働きについて調べておく。（復習）無機質の働きを理解し，日常生活での摂取について考える。
第6回 （予習）ビタミンの働きと日常生活でのビタミン摂取について，考えてみる。（復習）ビタミンの働きを理解し，ビタミンのより良い摂取方法を考える。
第7回 （予習）食品群にはどのようなものがあるかを調べておく。（復習）食生活指針等を参考にして自分の食生活を振り返る。
第8回 （予習）身近にある加工食品の表示内容を調べておく。（復習）加工食品を購入する際に，学んだことをもとにして表示を確認する。

○住生活分野

第1回（予習）現在の自分の住まいを見直してみる。（復習）授業内容を十分理解し、より快適な住まいについて考える。

○経済生活分野

第1回（予習）現代の消費生活について、文献を読んで考えておく。（復習）予習したことと授業で受けた講義内容を振り返り、消費者はどのように行動したらよいかを考える。

第2回（予習）消費者の権利と責任について、文献で調べておく。（復習）授業を振り返り、消費者はどのように行動したらよいかを考える。

○生涯発達・保育分野

第1回（予習）自分自身の家族や家族構成員について明確なイメージを形成してみる。（復習）授業を通じて、現在の自分がどのようにしてそのような自分となってきたかを問い直す。

視点2 家庭科の基本認識

教員養成課程における教科専門の位置付けを明確にしておくことは、家庭科の教科内容学を検討する上でも重要である。

教科専門と教科教育との関係性について議論がなされる際には、「その教科に関する専門科学の研究に長けていれば、当然、教えることも可能であろう」という意見や、「優れた卒業研究の指導を受け、その教科についての深い知識を得ることで、将来的には他の教科の指導力もついてくるであろう」といった考えが取りざたされる場合が多い（藤枝1990，高城2004）³。

このような考え方は、大学教員側からすれば1つの理想型ではあるものの、専門科学が高度に細分化された現在においては必ずしも得ているとは言い難い。また、学生の人格形成や教員としての資質の向上といった教員養成大学の目的からも若干乖離しているようにも思われる。

そこで、家庭科における教科の専門性について、小学校学習指導要領の記載に則り考えてみると、それは「衣食住や家族の生活」などの家庭生活に必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得する点に集約できると思われる。すなわち、教員養成課程においては、家庭生活について、人文・社会・自然科学の観点からの確に説明し得る教養を身に付けることが最重要といえる。さらに、その教養については、生活の発展・向上に資すること（よりよい生活に導くことができること）が望ましいと考える。

また、家庭科については、実践的・体験的な活動を通して学習するという教科における学習方法の特質がある。したがって、教科専門の在り方についても、単なる知識の獲得にとどまらず、製作や調理などの実習や観察・実験などの実践的・体験的な活動を通して理解する学習形態が求められる。その上で、他教科や領域との連携や、家庭生活を大切にす心情と家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度の育成に資するものでなければならないと考える。

視点3 体系的構造と内容構成

(1) 家庭科の教科理論と本質

教科内容学のシラバスを検討する際、家庭科の教科理論と本質について十分に理解しておくことはきわめ

³ 「在り方懇」においても、『教員養成の在り方として、教員養成学部内においても従来からいわゆる「アカデミシャンズ（学問が十分にできることが優れた教員の第一条件と考える人達）」と「エデュケーショニスト（教員としての特別な知識・技能を備えることこそが優れた教員の第一条件と考える人達）」との対立があり、それぞれの教科専門の教育指導の基本方針が、分野によりあるいは教員により違うという傾向がある。』との記載がある。

て重要である。

家庭科の教科理論，すなわち，何のためにこの教科を学ぶのかに対する答えとしては，「よりよく生きるために」という言葉に集約することができる（福田2005）。最も単純かつ原理的な考え方ではあるが，これは『家政学は，「家庭生活を中心とした人間生活」における人と環境との相互作用について，人的・物的両面から，自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し，生活の向上とともに人類の福祉に貢献する実践的総合科学である』とした家政学の定義から導かれるものでもある（日本家政学会1984）。

すなわち，家庭科は，複雑な生活の中で生じた疑問や問題を，自然・社会・人文科学などの知見にもとづく科学的分析によって解明する学問である。また，環境との関係からその価値や意義を判断し，生活の発展や向上に役立て，健康で文化的な生活の創造をめざす学問といえよう。

一方，家庭科の本質は，『「家庭生活を中心とする人間の生活」を総合的にとらえ，これを創造・発展させるための教科』とされているが，この考え方についても，やはり家政学の定義にもとづくものである（藤枝1990，福田2005）。

よって，前述した教科理論の内容が，家庭科の本質ということもできる。ただし，「よりよく生きる」ということは，当然，当事者のみに課せられた課題ではなく，家族，社会，国家，及び世界に関わる課題でもある。したがって，「家庭生活を中心とする人間の生活」を総合的にとらえるということは，家族の一員である児童・生徒が個人としてよりよい生活環境を求めるとともに，地域社会，国家，さらには地球環境についても学び，考えていかなければならないということである（藤枝1990，福田2005）⁴。

（2）家庭科の教科内容の構成

家庭科の内容構成については，前述の教科理論でいうところの「家庭生活を中心とする人間の生活」について何を基準として検討するのかによって異なるものである。たとえば，視点2において述べた「衣食住や家族の生活」といった構成は，学習指導要領を基準とした基本的なものであるが，同時に家庭科におけるゆるぎない内容でもあり，今回，教科内容学の構成を検討するにあたっても中核になるものと考え⁵。

また，日本家庭科教育学会では，家庭科教育の成果を確実にするためには，小学校から高等学校までの目標と内容の一貫性が必要との考えをもとに，家庭科の教育内容を「個人及び家族の発達と福祉」，「生活資源と暮らしの知識・技術」，「消費生活の営みと生活環境・文化」の領域にまとめている（牧野2000，内藤1997）。

ここでは，小学校段階の「個人及び家族の発達と福祉」における教育内容として「私と家族（親と子，きょうだいとの生活，祖父母と孫との生活，地域の人々との交流）」が，「生活資源と暮らしの知識・技術」としては「食べものと健康（栄養素の種類とはたらき，食べ方の工夫，初歩的調理技能）」，「衣服と健康（衣服のはたらきと着方，衣服の手入れ・選択，手縫いの技術）」，及び「すまいと健康（日照・日射と採光，

⁴ こういった家庭科の教科理論や本質は，1997年の「教養審」第一次答申（新たな時代に向けた教員養成の改善方策について）や2006年の「中教審」答申（今後の教員養成・免許制度の在り方について）において，「今後特に教員に求められる具体的資質能力」として挙げられているところの「地球視野に立って行動するための資質能力（地球，国家，人間等に関する適切な理解，豊かな人間性，国際社会で必要とされる基本的資質能力）」に直結するものと考えられる。

⁵ 家庭科の内容構成については「家庭科の教科構造はスパイラルであり，小・中・高でとりあげられる基本的生活要素そのものには変わりはないが，取り上げかたは，発展的で，深化したものでなければならない。小・中・高の連携をはかり，子どもの発達に応じた発展性のある教科内容を構築することが課題となってくる。」との考えがあり（中間1995），これは，中・高等学校の家庭科内容学を検討する際，きわめて参考になりうるものといえる。また，後述の，日本家庭科教育学会による「家庭科教育の成果を確実にするためには，小学校から高等学校までの目標と内容の一貫性が必要」との考えも（牧野2000，内藤1997），「家庭科の教科構造はスパイラル」であることに通ずるものともいえよう。

通気・換気と防湿・防菌，騒音と大気汚染，すまいの掃除と整理・整頓)」が，「消費生活の営みと生活環境・文化」としては「家庭生活のしくみ（家庭の仕事と家族の役割，時間とおかね，生活習慣と生活の知恵）」が，具体的な項目として述べられている。

一方，21世紀をひらく家庭科教育のあり方についての検討も行われており，そこでは家庭科教育が育む「生きる力（能力）」として以下のような概念が提案されているが（牧野2000，内藤1997），これらのいずれもが教科内容学の構成を考える際の参考ともなりうる。

小・中・高等学校に共通する家庭科の総括目標としては，「個人及び家族の発達と生活を総合的に捉えて，日々の生活活動の中で，主体的に判断して実践できる能力を育み，明日の生活環境・文化を創ることのできる資質・能力を育成する」と提示されており，次いでこれに対する学校段階別の資質・能力が示されている。

小学校段階においては，「生活を理解する能力」として「家族の中の自分を知り，家族と共に健康な暮らしに必要な生活技術を理解し，実践できる資質・能力を育む」と示されている。その一方，中学校，高等学校段階においては，「生活を科学的に実践する能力」，「生活を創造する能力」となっており，それぞれ「生活者としての自己認識と日常生活に関する科学的認識を基礎にして，生活を自律的に営む資質・能力を育む」，「多文化共生社会をめざす中で，個人・家族の生活を展望し，家庭生活や市民生活を創るために必要な資質・能力を育む」と提示されている。また，家庭科で育てる能力（能力育成のための認識・手段の基盤）として，「生活の自然科学的認識」，「生活の社会科学的認識」，「自立できる衣食住に関する生活技術」などが掲示されている。

（3）育成すべき教員像

家庭科教師は家庭科の重要性を認識するとともに，学習指導要領に示された教科のねらいや特性を十分に理解したうえで，教科内容についての正確な知識と技術を習得することが望ましいとされているが（中間2004），教科内容学を通して育成すべき教員像もこれに準ずるものといえる。

また，ここでは教師自身が身につけるべき能力として，①家族・家庭生活の意義を認識し，そのあり方を考える能力，②生活に必要な知識・技能を身につけ，主体的に生活できる能力，③生活の充実向上を図ろうとし，創意工夫できる能力，④広い視野に立って人間の生活を考え，実践できる能力，⑤社会の変化に対応した生活の重要性を認識し，積極的に情報を収集し授業に生かす能力，⑥児童・生徒の生活背景や状況の違いに理解を示し，一人ひとりを生かす能力，が挙げられている（中間2004）。

また，家庭科教師に求められる授業に関する能力としては，①教科内容と学習者の発達に関して理解する，②社会や家庭のニーズに関して理解する，③日本の教育の方向性と家庭科のあり方を考える，④様々な方略を組み込んだ授業を計画する，⑤家庭科の授業を実践する，⑥反省的实践家として成長する，といった枠組みも提案されているが（柴2005），これらはアメリカのCBTE（Competency-Based Teacher Education：能力に基本をおく教師教育）プログラムや，教育職員養成審議会及び教育課程審議会の答申を考慮し検討されたものである（柴2005）。

ここでは，それぞれの能力について細分項目が提示されているが，特に①の内容として示された「家庭科教育の背景学問である衣・食・住生活，家族，保育，家庭経営などの家政学（生活科学等）の中心的概念，学問構造，探究の方法を理解する」の項目が，教科内容学が目標とするところにも共通すると思われる。

視点4 学習指導要領の教科内容構成

「衣食住や家族の生活」などに関する実践的・体験的な活動を通して，家庭生活への関心を高めるとともに，生活をよりよくしようとする実践的な態度を育てることを目標としている。そのため，日常生活に必要な

な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付けることが重視されており、その教科内容は、「家庭生活と家族」、「日常の食事と調理の基礎」、「快適な衣服と住まい」、及び「身近な消費生活と環境」から構成されている。なお、これらの教科内容は、生涯にわたる家庭生活の基盤となる能力と実践的な態度を育成する視点から中学校と同じ4つの枠組みで構成されており、小学校と中学校の内容の体系化が図られている。

「家庭生活と家族」については、自分の成長を自覚することを通して、家庭生活と家族の大切さに気付くことができるように内容が構成されている。また、生活時間の有効な使い方や近隣の人々とのかかわりを考えることを通して、自分の家庭生活をより工夫できるような内容になっている。「日常の食事と調理の基礎」については、食事の役割を知ることや、1食分の献立を考えることを通して、体に必要な栄養素の種類と働きについて知ることができるような内容になっている。「快適な衣服と住まい」については、衣服や住まい方に関心をもつことを通して、日常着の快適な着方や季節の変化に合わせた快適な住まい方を工夫できるような内容になっている。「身近な消費生活と環境」については、身近な物の選び方や買い方を考えることを通して、物や金銭の大切さに気付くことができるよう内容が構成されている。また、自分の生活と身近な環境とのかかわりに気付くことを通して、環境に配慮した生活について工夫できるような内容になっている。

Ⅱ 教科内容の開発（小学校）

視点1 目標

「家庭生活を中心とする人間の生活（家庭生活における人と環境との相互作用）」について、人文・社会・自然科学の観点からの確に説明し得る教養を身に付け、生活の発展・向上を目的とした諸々の実践的・総合的な学問の基盤とすることを目標とする。これらの教養については、単なる知識の獲得に留まるのではなく、製作や調理などの実習や観察・実験などの実践的・体験的な活動を通して理解する。

また、その過程においては、他教科や領域との連携や、家庭生活を大切にする心情と家族の一員として生活をよりよくしようとする実践的な態度を育むことも重視する。

視点2 内容構成の視点

広範にわたる「家庭生活を中心とする人間の生活」について、「衣食住や家族の生活」を内容構成の視点とする。すなわち、ここでは学習指導要領に則り、「家庭生活と家族」、「日常の食事と調理の基礎」、「快適な衣服と住まい」、及び「身近な消費生活と環境」を視点とし、その背景にある学問の中心的概念、体系的構造、探究の方法を理解した上で、人文・社会・自然科学の観点からの確に説明し得る教養と技能を身に付けることとする。

視点3 教材分析

以下、小学校家庭科を指導する上で必要となる知識・技能について、内容構成の視点から列挙した。教材分析はこれら知識・技能の育成の観点から進めるのが適当と考える。すなわち、教科内容学の授業を展開する際においても、これらの内容が網羅されるよう十分配慮する必要があると考える。

(1) 家庭生活と家族

①人間の心身の成長を説明できる、②家庭生活の意義を説明できる、③家族の意義を説明できる、④生活を支える仕事としての職業労働と家事労働の説明ができる、⑤生活時間を構成する3つの側面が説明できる、⑥家族との触れ合いや協力の工夫を説明できる、⑦地域社会の一員として家庭の役割を説明できる。

(2) 日常の食事と調理の基礎

①なぜ食べるのかについて説明できる, ②食事のマナーについて説明できる, ③五大栄養素の働きについて説明できる, ④食品に含まれる主な栄養素により3つのグループに分けることができる, ⑤食品を組み合わせる取ることの必要性について説明できる, ⑥栄養面でバランスの取れた1食分の献立を作成することができる, ⑦献立作成の際に考慮すべきことを説明できる, ⑧必要な材料の分量や手順を考え, 調理計画を作成することができる, ⑨材料に応じた洗いができる, ⑩材料や作成する料理に応じた切り方ができる, ⑪適切な味付けを行うことができる, ⑫盛り付け, 配膳, 及び後片付けが適切にできる, ⑬食品をゆでることができる, ⑭食品をいためることができる, ⑮伝統的な日常食である米飯の調理ができる, ⑯伝統的な日常食であるみそ汁の調理ができる, ⑰調理に必要な用具の安全で衛生的な取扱いができる, ⑱地域の食文化について説明できる, ⑲地域の食材を生かした調理ができる。

(3) 快適な衣服と住まい

①衣服の衛生的, 社会的働きを説明できる, ②夏季・冬季の日常着の快適な着方について説明できる, ③地域の衣文化について説明できる, ④日常着の手入れについて説明できる, ⑤汚れが落ちる原理と過程を説明できる, ⑥手縫いをすることができる, ⑦ボタン付けができる, ⑧ミシンを用いた直線縫いができる, ⑨布を用いた生活に役立つものを説明できる, ⑩製作に必要な用具の説明ができる, ⑪製作に必要な用具の安全な取扱いができる, ⑫人間にとっての住まいの意義を説明できる, ⑬快適な住まい方について説明できる, ⑭なぜ, 掃除をしなければならないのかを説明できる, ⑮なぜ, 整理・整頓をしなければならないのかを説明できる。

(4) 身近な消費生活と環境

①生活の中の物の役割について説明できる, ②生活の中の金銭の役割について説明できる, ③なぜ, 物や金銭は計画的に使用しなければならないかを説明できる, ④適切な購入のための, 物の選び方, 買い方を説明できる, ⑤自分の生活と身近な環境との関わりを説明できる, ⑥環境に負荷を与えない物の使い方について説明できる。

なお, ここで教材分析を行うにあたり, 教科内容学に求められる体系について簡単な図を用いて表してみることとした。

まず, 図1 Aは学問体系の全体像を円柱形で示したものであり, 上に向かって学術水準が高くなっていることを示している。その基礎となっているのは緑色で示した部分であり, 高等学校までに修得した知識(図1 C)がその土台になるものとする。いわゆる大学の専門学部における学問(図1 B)はその上に位置する青色の部分であるが, その内容領域は多岐にわたっていることを考慮に入れて緑色の部分よりも大きな径としてある。

続いて, 図2 Cの青色の部分はそれぞれの専門学部における卒業, もしくは修了時に求められる形を示したものである。たと

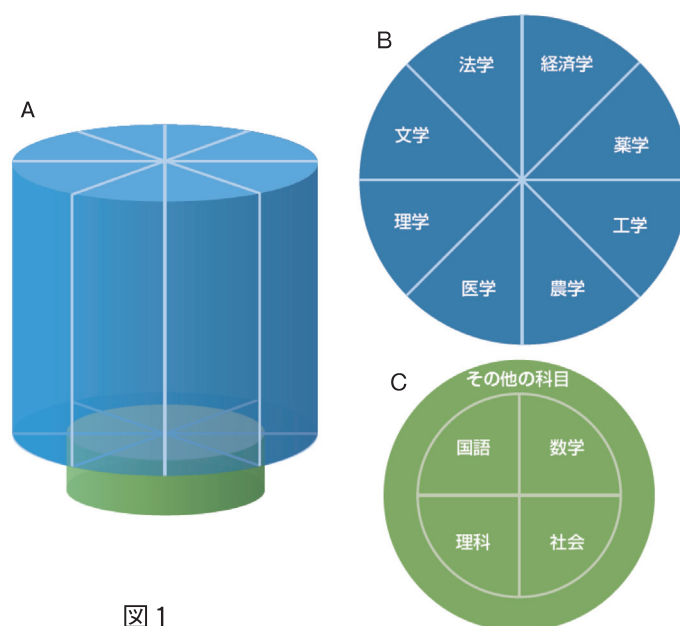


図1

えば、理学部であれば理学領域における高い水準の専門知識を身につけていることが望まれる。これに対して、教員養成学部卒業時に求められている形は図2 Bのオレンジ色の部分に相当し、家庭科内容学の授業においてもこの領域を網羅するのが適当と考える⁶。同心円方向の展開を重視することにより、専門学部（図2 C）では得ることのできないさまざまな知識・教養を身に付けることが可能となる。結果として、視点1において述べるところの『「家庭生活を中心とする人間の生活」について人文・社会・自然科学の観点から的確に説明し得る教養を身に付ける』という目標が達成できるものと思われる。さらにはそれが「学習指導力を有する教員を養成する」といった学部本来の目的にもつながるものと期待できる。

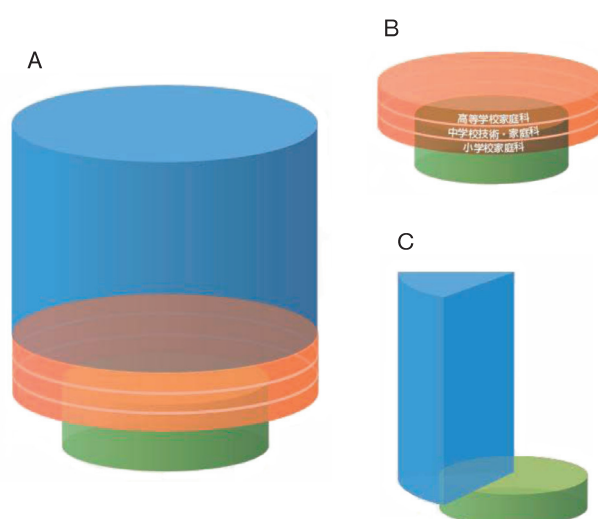


図2

加えて、家庭科内容学内の上方向への展開としては、Iの視点3に示した「家庭科の内容構造がスパイラル」であるという点を考慮に入れ、「小学校家庭科」の上に「中学校技術・家庭科」及び「高等学校家庭科」が積み上がる形とした（図2 Bのオレンジ色の部分）。この部分においては、教科内容学における重要な要素の1つである「子どもの発達段階に応じた教科内容を構築する」という点を示したつもりである⁷。

続いて、同心円方向の教養を重視し家庭科内容学の授業を展開する場合、その中心に何を置くべきかという本質的な点について考えてみると（図3 A）、それは視点1で述べた「家庭生活を中心とする人間の生活」であり、具体的には視点2で述べた「衣食住や家族の生活」に含まれる諸々の課題に他ならない。また、その到達目標としては、Iの視点3で述べた家庭科の教科理論に帰着するところの「よりよい衣食住や家族の生活」ということになる。

図3 Bには諸々の課題のうち

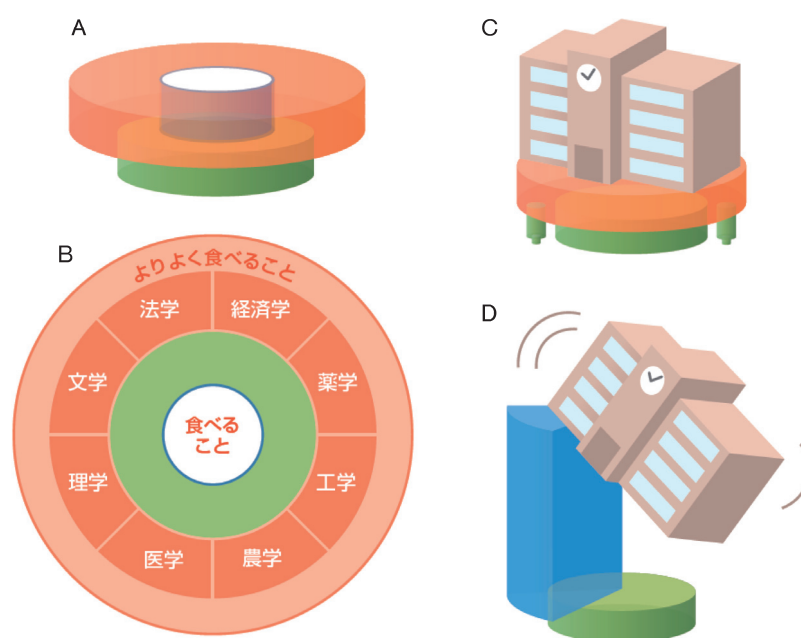


図3

⁶ なお、横方向の展開は、1997年「教養審」第一次答申や2006年「中教審」答申において述べられるところの「最小限必要な資質能力」という点を重視した結果であり、学術水準（縦方向）が低いことを意味するものではない。卒業時に得られる知識・教養を、図2 B、Cにおけるそれぞれの体積と考えれば同じくらいの量（水準）になると考える。

⁷ 「在り方懇」においても『必ずしも共通認識があるわけではないが、教員が教科を通して教育活動を展開していくことを考えれば、「子どもたちの発達段階に応じ、興味や関心を引きだす授業を展開していく能力の育成」が教員養成学部の教科専門科目に求められる独自の専門性といえよう。』との記載がある。

「食」についての例を示したが、図の中心には「食べること」が入り、最終的な目標としては「よりよく食べること」を置くことができる。すなわち、『人はなぜ「食べること」について勉強しなければならないのか』がここでの重要課題であり、そのことを中心に授業は展開されなければならない。また、その内容構成については人文・社会・自然科学の多岐にわたっていることが必須であり、この構成の中に先述の(1)～(4)の内容を網羅することが適当であると考ええる。

同心円的な授業展開を考える場合、参考となるのは学習指導要領やそれに基づいて編集された教科書であり、教科内容学の授業を担当する大学教員は、その内容について十分に理解していなければならない。また、他教科領域との連携を考慮すると、家庭科以外の教科内容や学習指導に必要な素養等についても把握していなければならない。

たとえば、「食」についての授業を行う場合、栄養素等に関する専門知識を提供するにとどまらず、それらが、我が国の食生活における問題点、学生自身の体調・生理、他教科の学習内容等とどのように関わっているのかを理解できるよう十分に配慮しなければならない。そうした土台の上にこそ「衣食住や家族の生活について科学的観点からの確に説明し得る知識・教養」、「学習指導力を有する教員」、さらには「理想的な学校教育」といったもの（図3 Cでは校舎で示した部分）が形成されていくものと考ええる。

すなわち、栄養素の消化・吸収・代謝等の専門領域に特化した講義を行えば、それは理学部の授業となんら変わらないことになり、そこには家庭科内容学は成り立たないことになる（図3 Dでは校舎が乗れない）。同時に、図3 Dは教員養成学部 of 教科専門の授業は他学部の講義で賄うことができるといった考え方も成立しないことを示すものである⁸。

ここでは「食」を扱う場合を例に説明を行ったが、当然、「衣食住や家族の生活」に含まれる他の課題も図3 Aの中心に置くことができる。たとえば、「着ること（衣）」、「住むこと」、「家族の生活」などの課題が考えられ、それらの到達目標としては、それぞれ「よりよく着ること」、「よりよく住むこと」、「よりよい家族の生活」が考えられる。

「家庭生活を中心とする人間の生活（家庭生活における人と環境との相互作用）」や「衣食住や家族の生活」といった内容は、人にとっては普遍的な課題である。よって、今後、学習指導要領等については改訂がなされると思われるが、図2、3に示した家庭科内容学の基本的体系については、その影響を受けずに不変であると考えられる。

なお、視点1で述べた「製作・調理などの実習や観察・実験などの実践的・体験的な活動」は、家庭科内容学におけるもう1つの重要な要素であることから、図3 Cにおいて知識・教養の土台を支える支柱として示してある。

Ⅲ シラバス例

本学の教科専門科目「家庭」に相当する「家庭（ブリッジ科目Ⅰ）」において試行授業を行ったので、その概要について述べる。以下、現行のシラバスを記載したが、家庭科内容学のシラバスとしては若干の修正が必要かもしれない。ただし、本シラバスの作成過程においては家庭科の教科理論等を含む長時間わたる議論が重ねられており、内容学のシラバスとしても十分成立するものと考ええる。

⁸ 結果として図2、3の発想は、「在り方懇」において述べられた「教員養成学部の独自性や特色を発揮していくためには、教科専門科目の教育目的は他の学部とは違う、教員養成の立場から独自のものであることが要求される。」や「教科専門科目担当教員は、他の学部と同じような専門性を志向するのではなく、学校現場で教科を教えるための実力を身に付けさせるためにはどうすべきかという、教員養成独自の目的に沿って教科専門の立場から取り組むことが求められる。」といった内容にも十分対応できるものと考ええる。

大学名：上越教育大学

科目名：家庭（ブリッジ科目Ⅰ）

学年：学部1年

授業方法：講義

単位数：2

授業の到達目標・テーマ：

家庭科の内容を「家族と生活」、「食と生活」、「衣と生活」、「環境と生活」、「消費と生活」、「住まいと生活」の視点からとらえ、個人、家族の福利をはかるために必要となる基礎的事項についての理解をはかる。個々の項目に関する到達目標については、各担当者から説明がなされる。

授業の概要：

家庭科の内容を「家族と生活」、「食と生活」、「衣と生活」、「環境と生活」、「消費と生活」、「住まいと生活」の視点からとらえ、個人、家族の福利をはかるために必要となる基礎的事項について解説する。

授業計画・内容：

- 1 オリエンテーション、「家庭」で何を学ぶべきか
- 2 日本の家庭科の歴史と諸外国の家庭科
- 3 食と生活（1）食べることの意義と食育の重要性について
- 4 食と生活（2）食べる仕組みと人が1日消費するエネルギーについて
- 5 食と生活（3）人が1日に摂取すべき栄養素について
- 6 食と生活（4）現代の食生活における問題点について
- 7 家族と生活（1）ブリッジ科目「家庭」とライフデザインⅠ（ライフデザインとは）
- 8 家族と生活（2）それぞれのためのライフデザインⅡ
- 9 家族と生活（3）それぞれのためのライフデザインⅢ（保育の視点から）
- 10 家族と生活（4）それぞれのためのライフデザインⅣ（家庭科教育の視点から）
- 11 衣と生活・環境と生活（1）被服とはたらきと快適な着方について
- 12 衣と生活・環境と生活（2）被服の手入れと環境保全との関わりについて
- 13 消費と生活：現代の消費と生活における問題点と対策
- 14 住まいと生活
- 15 まとめ

今回は「オリエンテーション」と「食と生活」の回において試行授業を行った。

「オリエンテーション」では、家庭科の教科理論や本質についてその背景学問となる家政学の概念を踏まえた上での解説を行ったが、学生が教科の重要性を認識することがその目的といえる。また、教員養成課程における「教科に関する科目」の位置付けや、学習指導要領についても簡単な解説を加えたが、それによって家庭科という教科のねらいや特性について理解できるものとする。

「食と生活」では、Ⅱの視点3において述べた「食べること」を中心に置いた授業展開を心がけた。「食べること」に関わる普遍的な課題である「あなたはなぜ食べるのですか？」と「あなたは何をどれだけ食べればよいと思いますか？」を中心に授業を進めた。

前半では、現在の日本や教育現場における食に関するさまざまな問題を取り上げ、「食べることの大切さ」や「食べる目的と仕組み」について言及した。後半では、「1日に必要なエネルギー」と「消費したエネルギーを補うためには」という相反する視点から栄養素についての解説を行った。ご飯や卵を食べるとどうなるのかといった具体例を中心に、学習内容を学生自身の生活に反映させて理解できるよう配慮した。

この講義では小学校家庭科教科書をテキストとして使用しているが、講義との関連性を明確にするために、教科書の記載内容についてもたびたび紹介した。また、諸々の課題に対して的確に説明し得る教養が身に付いたかどうかを確認するために、講義の最後には小テストを行った。加えて、実践面での内容不足を補うために、「一食分の食事をつくり、その工程と感想についてまとめる」といった調理実習の課題を与え、レポートの提出を義務付けた。

以上が今回の試行授業の概要であるが、その一部については後掲のシンポジウム分科会資料（パワーポイント資料）にも示した。また、試行授業の結果、明らかになった課題としては、限られた講義時間内にどういった内容をどこまで教授するのかをある程度明確にしておく必要があるという点である。授業にどのような内容を取り上げるかについては、担当教員の裁量に任されるところではあるが、家庭科内容学という視点からはある程度の統一した方針や見解が必要になるものとする。そのためには、たとえば、「家庭科内容学（食と生活）」といった大学レベルの教科書を作成することも重要と思われ、今後はその内容についての議論がなされるべきと考える⁹。

参考文献一覧

- 藤枝恵子（1990）「教科教育学」の成立条件を探る－家庭科教育学の立場から、『教科教育学の成立条件－人間形成に果たす教科の役割』、東洋館出版社、東京、46-60.
- 福田公子（2005）家庭科教育の意義、『教育実践力をつける家庭科教育法』、大学教育出版、岡山、1-11.
- 牧野カツコ（2000）これからの家庭科教育、『家庭科教育50年』、建帛社、東京、57-58.
- 文部科学省（2008）小学校学習指導要領.
- 文部科学省（2008）中学校学習指導要領.
- 内藤道子（1997）家庭科で育む能力と教育内容（ミニマムエッセンシャルズ）、『家庭科の21世紀プラン』、家政教育社、東京、113-121.
- 中間美砂子（1995）生活課題解決による生活文化の創造－家庭科教育学の現代的課題、『21世紀に求められる教科教育の在り方』、東洋館出版社、東京、79-90.
- 中間美砂子編（2004）『家庭科教育法－中・高等学校の授業づくり』、建帛社、東京、186-187.
- 日本家政学会（1984）家政学の定義、『家政学将来構想1984』、光生館、東京、31-32.
- 柴静子（2005）家庭科教師にはどのような能力が必要だろうか、『教育実践力をつける家庭科教育法』、大学教育出版、岡山、176-188.
- 高城忠（2004）「生き物としての人間」の教育の原点を考える－Ⅳ．「生き物としての人間」の教育の担い手、つくば生物ジャーナル3：TJB200412TT4.

⁹ ここで述べた「統一した方針や見解」に関して、「在り方懇」においては「教員養成における体系的なカリキュラムは、教員養成に携わる教員の間において必ずしも確立しているとはいえない状況にある。教員養成に関する共通的な認識を醸成し、教員の質を高めていくためには関係者においてモデル的な教員養成カリキュラムを作成することが効果的と思われる。」との記載がある。これを受けて鳴門教育大学では「教員養成に関するモデルカリキュラムの作成に関する調査研究」が行われており、そこで作成されたカリキュラムマップは教科書の内容を検討する際にもきわめて有効であるとする。